

アラブ系譜学の誕生と発展

高野 太 輔

The Development of the Arab Genealogy

KONO Taisuke

§ 1 はじめに

個人の系譜が何らかの社会的意味を持つ共同体の内部では、当然ながら、多くの構成員が自己ないし他者の系譜を暗記している。系譜学という学問の原初的な形態が系譜の暗記作業にあるとすれば、その萌芽は系譜意識の発生と同じぐらい古い時期に遡るであろう。

アラビア語では、自族もしくは他集団の系譜（ナサブ *nasab*）に詳しい人物のことをナッサーブ（*nassāb*, 複 *nussāb*）と呼んでいる。イスラムが成立した当初のナッサーブとは、様々な個人・集団の系譜を暗唱し、アラブ民族の歴史に造詣の深い人物を指すのが普通であった。しかし、アッバース朝が成立した西暦8世紀後半に入ると、同時期に発展した他の様々な学問分野と並んで、系譜学（*ilm al-nasab*）と呼ばれる独自のジャンルが誕生することになる。系譜学とは、単に自分と関係のある系譜群を口伝によって暗記・伝達するだけではなく、そうした無数の伝承を網羅的に収集・整理し、様々な個人の出自を明らかにすると同時に、アラブ民族の総合的な系譜体系を構築しようとした学問である。

本稿では、アラブの系譜学が誕生・発展してきた過程を通時的に観察すると共に、彼らの用いた方法論の特徴について、考察を加えることにしたい。まず始めに、史料の刊本と略号の一覧を記しておく。

Aghānī: Abū al-Faraj al-Iṣṣbahānī (d. A.H.356/A.D.967), *Kitāb al-Aghānī*, 20 vols. Beirut, 1970.
(reprint of Būlāq edition)

Fihrist: Ibn al-Nadīm (d. 385/995), *Kitāb al-Fihrist*, ed. Riḍā Tajaddud, Tehran, 1971.

Ḥazm: Ibn Ḥazm (d. 456/1064), *Jamharah Ansāb al-'Arab*, Beirut, 1983.

Hishām: Ibn Hishām (d. 204/819), *Al-Sīrah al-Nabawīyah*, ed. F. Wüstenfeld, 2 vols, Göttingen, 1858-60.

'Iqd: Ibn 'Abd Rabbi-hi (d. 328/940), *Al-'Iqd al-Farīd*, ed. Muḥammad Sa'īd al-'Uryān, 8 vols,

Dār al-Fikr, n.d.

Ishtiqaq: Ibn Durayd (d. 321/933), *Kitāb al-Ishtiqaq*, ed. F. Wüstenfeld, Göttingen, 1854.

Jāhiz: al-Jāhiz (d. 255/868), *Al-Bayān wal-Tabyīn*, ed. 'Abd al-Salām Muḥammad Hārūn, 4 vols, Beirut, 1990.

Kalbī-1: Hishām b. al-Kalbī (d. 204/819), *Jamharah al-Nasab*, ed. Bājī Ḥasan, Beirut, 1986.

Kalbī-2: ——. *Nasab Ma'add wal-Yaman al-Kabīr*, ed. Bājī Ḥasan, 2 vols, Beirut, 1988.

Ma'ārif: Ibn Qutaybah (d. 276/889), *Al-Ma'ārif*, Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyah, 1987.

Qalqashandī: al-Qalqashandī (d. 821/1418), *Nihāyah al-Arab fī Ma'rifah Ansāb al-'Arab*, Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyah, n.d.

Sa'd: Ibn Sa'd (d. 230/845), *Al-Ṭabaqāt al-Kubrā*, ed. Muḥammad 'Abd al-Qādir 'Aṭā, 9 vols, Beirut, 1990.

Sam'ānī: al-Sam'ānī (d. 562/1166), *Al-Ansāb*, ed. 'Abdallāh 'Umar al-Bārūdī, 5 vols, Beirut, 1988.

Ṭabarī: al-Ṭabarī (d. 310/923), *Ta'rīkh al-Rusul wal-Mulūk*, 15 vols, Leiden, 1879-1901.

Tahdhīb: Ibn Ḥajar al-'Asqalānī (d. 852/1449), *Tahdhīb al-Tahdhīb*, ed. Khalīl Ma'mūn Shīḥā, 6 vols, Beirut, 1996.

Ya'qūbī: al-Ya'qūbī (d. ca. 292/905), *Ta'rīkh al-Ya'qūbī*, 2 vols, Beirut: Dār Ṣāder, 1992.

§ 2 最初期のナッサーブ

後代の伝承に拠ると、既に預言者ムハンマドの時代において、様々な個人や集団の系譜に詳しいナッサーブが数多く存在したという。クライシュ族の中で最もアラブの系譜に通じていたと見なされているのは、初代カリフとなったアブー・バクル *Abū Bakr al-Ṣiddīq* (13/634年没) である。例えば、彼については *ʿIqd* 所収の次のような伝承がある。

[1] イクリマがイブン・アッバースから聞き、イブン・アッバースがアリー・ブン・アビー・ターリブから聞いた話。

アリーは言った。神の使徒（神の祝福と平安あれ）が〔アラブの〕諸族にイスラムへの改宗を呼びかけていた頃、私 [=アリー] とアブー・バクルは、使徒と共にアラブの人々が集まっている場所へ出かける機会があった。すると、アブー・バクルが〔彼らの方へ〕近付いて、挨拶した。

アリーは〔続けて〕言った。アブー・バクルは、あらゆる美質において抜きん出た人物であったが、同時に優れたナッサーブ (*nassābah*)¹ でもあった。アブー・バクルは言った。「君達は、誰の子孫か。」彼らは答えた。「ラビーア族の者です。」彼は言った。「君達は、ラ

ビーア族のどの集団に属しているのか。一族の大物 (hāmah)² の子孫か、それともラハー
ズィム (Lahāzim)³ か。」彼らは言った。「有力な大物の子孫です。」彼は言った。「君たち
は、どの有力な大物の子孫か。」彼らは言った。「大ズフル Dhuhl al-Akbar です⁴。」

アブー・バクルは言った。「君達は、＜アウフの谷に抗う者なし＞と歌われたアウフ・ブ
ン・ムハッリム⁵の一族かね。」彼らは言った。「違います。」彼は言った。「では、＜良き守
護者＞とも＜隣人の保護者＞とも言われるジャッサース・ブン・ムッラ⁶の一族かね。」彼ら
は言った。「違います。」彼は言った。「では、キンダ族の諸王の母方の叔父の一族かね⁷。」
彼らは答えた。「違います。」彼は言った。「では、ラフム族の諸王の婿の一族かね⁸。」彼ら
は答えた。「違います。」すると、アブー・バクルは言った。「君達は、大ズフルではなく、
小ズフル Dhuhl al-Aṣghar の子孫だ⁹。」¹⁰

つまり、アブー・バクルはクライシュ族ばかりでなくラビーア族の系譜にも精通しており、メッ
カで出逢った人々の出自を正確な知識によって看破したという逸話である。アブー・バクルを系
譜的知識の権威と見なす伝承は広汎に観察され、イブン・ハズムの系譜学書¹¹、イブン・ヒシャ
ームの『預言者伝』¹² などにも、同種の情報が記されている。また、ジャーヒズ al-Jāhiz はアブー・
バクルを「アラブの中で最も系譜に詳しかった人 (ansab hādhihi al-ummah)」と評し、それに
次いで第2代カリフのウマル・ブン・アルハッターブ、ジュバイル・ブン・ムトイム Jubayr b.
Muṭ'im (59/678-9年没)¹³、サイード・ブン・アルムサイイブ Sa'īd b. al-Musayyib (94/712-3年
没)¹⁴、その息子ムハンマド・ブン・サイード Muḥammad b. Sa'īd (没年不詳)¹⁵ などが優れたナッ
サーブであったと述べている¹⁶。

このうち、カリフのウマル・ブン・アルハッターブは、兵士登録台帳＝ディーワーン (dīwān)
を創設するにあたって、様々なナッサーブの協力を仰いだという情報もある。例えば、以下に挙
げたのは *Ṭabarī*, 5/626-7年の記事である。

[2] ワリード・ブン・ヒシャーム・ブン・アルムギーラは、ウマルに言った。「信徒の長よ、
私はシリアに行きましたが、彼の地の王達がディーワーンを編成し、軍を徴兵するのを見ま
した。貴方もディーワーンを編成し、軍を徴兵してください。」ウマルは彼の言葉を聞き入
れ、ウカイル・ブン・アビー・ターリブ 'Uqayl b. Abī Ṭālib、マフラマ・ブン・ナウファル、
ジュバイル・ブン・ムトイムを呼び出した。彼らは、クライシュ族のナッサーブ達 (nussāb
Quraysh) であった。¹⁷

Ḥazm や *Jāhiz* などの史料には、この他にも最初期のナッサーブとして数多くの人名が紹介さ
れている¹⁸。彼らは、様々な系譜情報を暗記していると同時に、ジャーヒリーヤ時代のアラブ史
についても豊富な教養を持つと考えられていた。

一方、*Fihrist*に記載された最古のナッサーブは、ダグファル *Daghfal* という人物である。ダグファルはバクル・ブン・ワーイル族の下位集団であるサドゥース *Sadūs* 族の出身と言われているが、その詳しい生涯については分かっていない¹⁹。まず、*Fihrist*に記された彼に関する情報を以下に挙げておく。

[3] ダグファル・アンナッサーバ。…彼〔の本名〕はフジュール・ブン・アルハーリス・アルキサーイー²⁰であり、ダグファルとは渾名である。一説に拠ると、彼はズフル族²¹であり、ダグファル・ブン・ハンザラ・アッサドゥースィーであるという。彼は預言者（平安あれ）の生前に生まれていたが、彼と面識は無かった²²。

ダグファルがムアーウィヤの許を訪れた際、クダーマ・ブン・ダッラール・アルクライイー²³と会う機会があった。ダグファルは、クライウ族²⁴の系譜を〔上から順に〕言い当て、クダーマ自身の父親のところまで来ると、言った。「ダッラールは2人の息子をもうけ、1人は禁欲主義者（*nāsik*）、もう1人は詩人（*shā'ir*）だったはずですよ。貴方は、どちらの方ですか。」クダーマは言った。「私は愚かな詩人の方です。貴方は、私の系譜ばかりでなく、私に関する全てのことを言い当てました。ついでに、私がいつ死ぬのかも教えてください。」ダグファルは言った。「そこまでは私にも分かりませんよ。」

ダグファルは、ハワーリジュ派（*al-shurāh*）²⁵に殺害された。彼には、著作（*muṣannaf*）が残っていない²⁶。

この伝承に見られる通り、ダグファルはアラブの系譜に関する知識を様々な場所で披露した人物として描かれることが多い。以下に挙げたのは、前掲[1]の続きの部分である。

[4] すると、まだ髭が生え始めたばかりのダグファルというシャイバーン族の若者が、〔アブー・バクルの方へ〕近付いてきて言った。「＜我らに尋ねし者に、我らも尋ねなければならぬ。〔きちんと答えることの〕重荷など知ったことではない＞。もし、そこの御方。貴方は我々に物を尋ね、我々は何事も包み隠さず、それに答えました。それなら、貴方は誰の子孫なんです。」アブー・バクルは言った。「クライシュの子孫だ。」

ダグファルは言った。「ほう！ 名誉と権勢のある一族ですね。それなら、貴方はクライシュ族のどの集団に属しているのですか。」アブー・バクルは言った。「タイム・ブン・ムッラ²⁷の子孫だ。」ダグファルは言った。「神かけて、弓兵の首の真ん中を射抜くような答ですね。では、諸家を団結させて＜まとめる者（*mujammi'*）＞と呼ばれた²⁸クサイイ・ブン・キラブの一族ですか。」アブー・バクルは言った。「違う。」ダグファルは言った。「では、＜飢えと日照りで痩せ細ったメッカの人々のためにサリードを作らせた＞²⁹ハーシムの一族ですか。」アブー・バクルは言った。「違う。」ダグファルは言った。「では、天の鳥に餌を与え、その

顔は闇夜でも月のように輝いたという、アブド・アルムッタリブこと、優れたシャイバ³⁰の一族ですか。」アブー・バクルは言った。「違う。」ダグファルは言った。「それなら、貴方はイファーダ (al-ifāḍah) の権利³¹を持つ人々の一族ですか。」アブー・バクルは言った。「違う。」ダグファルは言った。「それなら、貴方はシカーヤ (al-siqāyah) の権利³²を持つ人々の一族ですか。」アブー・バクルは言った。「違う。」

ここに至ってアブー・バクルは、ラクダの手綱を引っ張り、神の使徒（神の祝福と平安あれ）の許へ戻ってしまった³³。

アブー・バクルがラビーア族の系譜に詳しかったように、ダグファルもまたクライシュ族の系譜と歴史に関する知識を披露して、反対に彼をやり込めたという逸話である。ダグファルに関する逸話は他にも数多く残っており、いずれもアラブ諸集団の系譜や、ジャーヒリーヤ時代の出来事に関する知識の豊富さを示すという筋立てになっている³⁴。

*Fihrist*が記している最初期のナッサーブとしては、ダグファルの他に、リサーン・アルフマッラ Lisān al-Ḥumarrāh³⁵、サッハール Ṣaḥḥār al-'Abdī³⁶、シャルキー・ブン・アルクターミー al-Sharqī b. al-Qutāmī³⁷、イブン・アルカウワー Ibn al-Kawwā³⁸、サアド・アルカスィール Sa'd al-Qaṣīr³⁹、クルクビー al-Qurqubī⁴⁰、アワーナ 'Awānah b. al-Ḥakam al-Kalbī⁴¹、ハンマード Ḥammād⁴²などの名が挙がっている⁴³。

これら最初期のナッサーブは、特定の著作こそ無いものの、いずれも口伝の系譜情報を豊富に暗記していた「系譜的知識の権威」として描かれている。しかし、ハディース史料の情報源となった教友 (ṣaḥābah) の場合とは異なり、彼らの保持していた情報を「典拠」とする系譜情報は、現存する系譜学書の中に全くと言って良いほど残っていない。後述する通り、アッバース朝時代に編纂された各種の系譜学書には、情報伝達者の連鎖を示すイスナード (isnād) の類が附されていない点に特徴がある。従って、これら最初期のナッサーブ達が本当に数多くの系譜を暗唱していたのか、それとも後代における系譜学の隆盛を過去の人物に投影したものに過ぎないのかは、判然としないのが実状である。

また、これら最初期のナッサーブの活躍が事実であったとしても、彼らは多数の系譜を暗記していた単なる系譜伝承者であり、アラブの系譜を体系化しようとした形跡は全く見られないことも重要である。*Aghānī*所収の伝承に拠ると、アラブの系譜を最初に収集・整理して体系化しようとしたのは、ウマイヤ朝末期の伝承学者ズフリー Ibn Shihāb al-Zuhri (124/742年没) であったという。

[5] マダーイニーは、その伝承の中で次のように伝えている。イブン・シハーブ [=ズフリー] は、私に語った。[イラク総督の] ハーリド・ブン・アブドッラー・アルカスリー⁴⁴が、私に「系譜の書を書いてみよ」と言った。そこで、私はムダルの系譜から手をつけたが、いまだ

に完成していない。⁴⁵

この伝承の信憑性は定かでないが、ウマイヤ朝時代に執筆された系譜学書の題名が *Fihrist* に見当たらない点から見ても、ズフリー以前の時代には、アラブの系譜を文字として記す試みは為されなかったと判断して良いであろう。

§ 3 系譜学の誕生

時代が下ってアッバース朝の治世に入ると、単に多くの系譜を暗唱・伝達するだけではなく、これを網羅的に収集・整理して、アラブ全体の系譜を体系化しようとする動きが出てきた。これが、いわゆる系譜学 (*ilm al-nasab*) の誕生である。

まず、ヒジュラ暦2世紀後半になると、文字として記録された系譜学書の名が初めて *Fihrist* に現れてくる。その中でも最古の文献は、アブー・アルヤクザーン *Abū al-Yaqzān* (170/786-7年没)⁴⁶ が著した一連の作品である。彼の著作として挙げられているのは、『タミーム族の相互の同盟 (*Kitāb Hilf Tamīm Ba'd-hā Ba'dan*)』、『タミーム族の情報 (*Kitāb Akhbār Tamīm*)』、『ヒンディフ族⁴⁷の系譜と情報 (*Kitāb Nasab Khindif wa-Akhbār-hā*)』、『大系譜書 (*Kitāb al-Nasab al-Kabīr*)』、『珍しい表現形式 (*Kitāb al-Nawādir*)』の5点であり、いずれも散逸しているが、このうち少なくとも『ヒンディフ族の系譜と情報』『大系譜書』の2点は、その題名から推察して明らかに系譜学書である⁴⁸。*Fihrist*に拠ると、『大系譜書』の中には、イヤード *Iyād* 族、キナーナ *Kinānah* 族、アサド *Asad b. Khuzaymah* 族、フーン *al-Hūn b. Khuzaymah* 族、フザイル *Hudhayl b. Mudrikah* 族、クライシュ *Quraysh* 族、タービハ *Banū Ṭābikhah* 族、カイス・アイラーン *Qays 'Aylān* 族、ラビーア *Rabī'ah b. Nizār* 族、タイム *Taym b. Murrah* 族⁴⁹の系譜が収められていたと言う。これが事実であるとすれば、アブー・アルヤクザーンは少なくともアドナーン族(北アラブ族)の大半について、その系譜の全容を体系化していたことになる。

残念ながら、アブー・アルヤクザーンの作品は完全に散逸していて、我々はその内容を具体的に検討することができない。後代の史料に引用されている断片的な情報についても、幾つかの些末な伝承のイスナードに彼の名前が挙がっているのみであり、彼自身の確立した系譜学の体系については、全く不明であると言ってよい。

このアブー・アルヤクザーンと相前後して現れた系譜学者に、サドゥースィー *Mu'arrij b. 'Amr al-Sadūsī* (195/810-1年没)、アブー・アルバフタリー *Abū al-Bakhtārī Wahb b. Wahb* (200/815-6年頃没)、ハイサム・ブン・アディー *al-Haytham b. 'Adī al-Ṭā'ī* (207/822年没)、そしてヒシャーム・ブン・アルカルビー *Hishām b. al-Kalbī* (204/819年没) などがいる。

サドゥースィーは、ダグファルと同じサドゥース族の出身で、バスラに生まれた学者である。彼の著作のうち⁵⁰、系譜学書として有名なのは『クライシュ族の系譜概略 (*Ḥadhf min Nasab*

Quraysh)』であり、この作品は現存する最古の系譜学書として重要な文献である。同書の冒頭部分には、「この書は系譜の概略 (*ḥadhf*) である。もし、私が網羅的な本を書くとするれば、預言者 (神の祝福と平安あれ) の伝記 (*sīrah*) と、アッバース家の伝記を書くことに長い年月を費やさねばならないだろう」と書かれており、実際にクライシュ族の系譜の一部のみを扱った作品となっている。その記述の特徴は、(1) クライシュ族の諸家が後代に見られるように整然と並列されておらず、カアブ・ブン・ルアイイの子孫のみが記述の対象とされていること、(2) クライシュの子孫ばかりでなく、諸家のハリーフ (*ḥalīf*) についても若干の紹介が行われていること、(3) 著名な人物の羅列と紹介に重点が置かれており、無名の人物を含めた体系的な系譜叙述は試みられていないこと、の3点である。

一方、アブー・アルバフタリーは、クライシュ族アブド・アルウッザー家の血を引く法学者で、ハールーン・アッラシードの治世 (170-93/786-809年) に各地の法官・総督を歴任したと言われている。*Fihrist*に拠ると、その著書には『戦旗の書 (*Kitāb al-Rāyāt*)』『タズム族とジャディース族の書 (*Kitāb Ṭasm wa-Jadīs*)⁵¹』『預言者の描写 (*Kitāb Ṣifāh al-Nabī*)』『アンサールの美德 (*Kitāb Faḍā'il al-Anṣār*)』『大美德書 (*Kitāb al-Faḍā'il al-Kabīr*)』『イスマーイル・ブン・イブラーヒームの子孫の系譜 (*Kitāb Nasab Walad Ismā'il b. Ibrāhīm*)』の6点があった⁵²。アブー・アルヤクザーンの場合と同様に、これらの作品は完全に散逸している。

ハイサム・ブン・アディーは、クーファで生まれた歴史学者である。*Fihrist*に挙げられた著作は50点を超えるが、そのうち系譜学およびジャーヒリーヤ研究に属するものとしては、『タイイ族の系譜 (*Kitāb Nasab Ṭayyī*)』『アラブの名家 (*Kitāb Buyūtāt al-'Arab*)』『クライシュ族の名家 (*Kitāb Buyūtāt Quraysh*)』『カルブ族とタミーム族の同盟、ズフル族の同盟、タイイ族とアサド族の同盟 (*Kitāb Ḥilf Kalb wa-Tamīm wa-Ḥilf Dhuhl wa-Ḥilf Ṭayyī wa-Asad*)』など多数がある⁵³。その記述はタバリー、ヤアクービー、マスウーディーなど多くの文人に引用されているが、彼の著作自体は全て散逸している。

この他、ワーキディー *Muḥammad b. 'Umar al-Wāqidī* (207/822-3年没) の『クライシュ族とアンサールによる土地分譲の要求とウマルによるディーワーン編成および諸部族の分類と序列と系譜 (*Kitāb al-Madā'ī Quraysh wal-Anṣār fil-Qiṭā' wa-Waḍ' 'Umar al-Dawāwīn wa-Taṣnīf al-Qabā'il wa-Marātib-hā wa-Ansāb-hā*)』⁵⁴、マダーイニー *'Alī b. Muḥammad al-Madā'inī* (215/830年頃没) の『クライシュ族の系譜と情報 (*Kitāb Nasab Quraysh wa-Akḥbār-hā*)』『名家の書 (*Kitāb al-Buyūtāt*)』『アブド・アルカイス族の名士達 (*Kitāb Ashrāf 'Abd al-Qays*)』『サキーフ族の情報 (*Kitāb Akḥbār Thaḳīf*)』⁵⁵ など、書名から推して明らかに系譜学関連の著作と考えてよいだろう。

このように、アッバース朝の支配体制が盤石のものとなったヒジュラ暦2世紀の後半には、歴史学、文法学、詩学などの急速な発展と並んで、アラブの系譜学も研究が進み、その成果が次々と文字化されるに至った。こうした動きの頂点に位置するのが、次に述べるヒシャーム・ブン・

アルカルビーの作品である。

§ 4 ヒシャーム・ブン・アルカルビーと『大系譜書』

ヒシャーム・ブン・アルカルビー Hishām b. Muḥammad b. al-Sā'ib al-Kalbī (204/819年没) は、アッバース朝時代中期のクーファで活躍した系譜学者およびジャーヒリーヤ学者である。父のムハンマド・ブン・アルカルビー Muḥammad b. al-Sā'ib al-Kalbī (146/763年没) もウマイヤ朝時代後期のクーファで活躍した学者であり、特にジャーヒリーヤ時代の伝承や詩学の研究に秀でていたと言われている⁵⁶。ヒシャーム・ブン・アルカルビーは、父ムハンマドの研究を受け継ぐ形で、様々な分野に渡る150点以上の作品を残した。現存する代表的な著作としては、ここで問題とする『大系譜書 (*Kitāb al-Nasab al-Kabīr*)』の他に、アラブ諸集団の多神教崇拝を記録した『偶像の書 (*Kitāb al-Aṣnām*)』などがある。

ヒシャーム・ブン・アルカルビーの著した系譜学書は、南北アラブ全集団の系譜を初めて網羅的かつ詳細に叙述したもので、その後に続いた系譜学者達の最も重要な典拠となった作品である。以下、この作品の成立過程と特徴について、詳しく見ていくことにしたい。

(1) 『大系譜書』の成立過程

ヒシャーム・ブン・アルカルビーの系譜学書として現存する写本は、大英図書館蔵『系譜大全 (*Jamharah al-Nasab*)』(写本L)⁵⁷、エスコリアル修道院図書館蔵『マアッドとヤマンの大系譜書 (*Nasab Ma'add wal-Yaman al-Kabīr*)』(写本E)⁵⁸、および要約版であるラークブ・パシャ図書館蔵『系譜大全概略 (*Mukhtaṣar Kitāb Jamharah al-Nasab*)』(写本 Mukh)⁵⁹、カイロ国立図書館蔵『系譜大全抜粋 (*al-Muqtaḍab min Kitāb Jamharah al-Nasab*)』(写本 Muq)⁶⁰の4つである。これらの写本の成立過程については、W・カスケルによる詳細な研究があるため⁶¹、その内容を参照しながら、順次説明していくことにしたい。

前述の通り、ヒシャーム・ブン・アルカルビーは父ムハンマドの研究をそのまま受け継ぐ形で、様々な分野に渡る膨大な作品群を残したと考えられている。しかし、*Fihrist*に記載されたムハンマド・ブン・アルカルビーの項目には、彼が何らかの具体的な文献を残したという情報が、全く伝えられていない⁶²。従って、『大系譜書』に見られるアラブの系譜群を体系化したのは、カルビー父子のどちらなのか、という疑問が最初に生じる。

この問題についてカスケルは、現存する写本Eの記述を分析し、その第1葉が「アブー・アルムンズイル・ヒシャーム・ブン・ムハンマド・ブン・アッサーイブ・アルカルビーは語った」という記述で始まっているのに対して、最終葉には「ムハンマド・ブン・アッサーイブ・アルカルビー著『マアッドとヤマンの大系譜書』完結す」⁶³と書かれている事実を指摘した。この写本の

記述が正しいとすれば、まず父ムハンマドの作として『マアッドとヤマンの大系譜書』という文献があり、これを息子のヒシャームが引き写したという可能性が、最も高いと言えよう。

更にカスケルは、写本L・写本Eの両作品に含まれた人名情報を分析し、マンスール治世（136-58/754-75年）に活躍した人物が数多く含まれているにも関わらず、ラシード治世（170-93/786-809年）に活躍した人物が殆ど含まれていない事実を発見した。従って、この作品は父ムハンマド（146/763年没）が晩年に著した『マアッドとヤマンの大系譜書』を、息子ヒシャーム（204/819年没）がほぼ同じ形で引き写したものであると、カスケルは推測している。但し、(1)ムハンマド・ブン・アルカルビーの死後に活躍した人物の名も一部に含まれていること、(2)ヒシャーム・ブン・アルカルビーが自らの情報源として父以外の人物の名を挙げている例があることなどから、両者の作品は全く同じ内容ではなく、ヒシャーム独自の情報も含まれていることに注意しなければならない。

*Fihrist*に記された情報に拠ると、ヒシャーム・ブン・アルカルビーの作品として巷間に出回っていた系譜学書は、『マアッドとヤマンの大系譜書』ではなく、『大系譜書 (*Kitāb al-Nasab al-Kabīr*)』という題名で知られていた。その目次の内訳を見る限り⁶⁴、『大系譜書』はムダル系とヤマン系の全系譜集団を網羅した書物であり⁶⁵、クライシュ族の諸家に関する系譜書が独立した項目として附せられていた様子が観察される。

その後、この作品の伝承系統は大きく分けて2つの流れを持つようになった。1つは、ヒシャーム・ブン・アルカルビーの原稿をムハンマド・ブン・ハビーブ *Muḥammad b. Ḥabīb* (245/860年没) が入手し、これをスッカリー *al-Ḥasan b. al-Ḥusayn al-Sukkarī* (275/888年没) が校訂したもので、その題名は『大系譜書』ではなく、『系譜大全 (*Jamharah al-Nasab*)』となっている点に特徴がある。この系統から派生したのが写本Lであるが、同書の要約版である写本 Mukh と写本 Muq も、これを参照したと考えられている。

もう1つは、ムハンマド・ブン・ハビーブやスッカリーの校訂を経ずに伝わったもので、この系統から写本Eが派生している。同写本には題名が欠落しているため、前述した最終葉の記述を基に、『マアッドとヤマンの大系譜書』と呼ばれるのが普通である。またカスケルに拠れば、イブン・ハズム *Ibn Ḥazm* (456/1064年没) の『アラブ系譜大全 (*Jamharah Ansāb al-'Arab*)』や、イブン・ドゥライド *Ibn Durayd* (321/933年没) の『派生の書 (*Kitāb al-Ishtiqāq*)』は、こちらの系統を参照している形跡があるという。

写本 Mukh と写本 Muq はいずれも要約版であるため、原著に含まれる系譜群の詳しい内容を保存した写本は、写本Lと写本Eの2つのみとなる。しかし、現存する写本Lではカフターン族（南アラブ）に関する記述の大半が脱落しており、アドナーン族（北アラブ）の全てとアウス族の系譜のみを保存している。逆に、写本Eではアドナーン族（北アラブ）に関する記述の大半が脱落し、カフターン族（南アラブ）の全てとラビーア族の系譜のみを保存している。従って、写本L・写本Eの双方を突き合わせれば、原著『大系譜書』に収録されていた系譜群は、ほぼ完全

な形で復元できるということになる。

両写本の間では、写本Lでカフターン族（南アラブ）の筆頭に来ているアウス族が、写本Eでは中途に置かれていたりなど、配列上の異同が大きい。しかし、両者の間で重複しているラビーア族とアウス族の系譜叙述を見ると、その内容は細部に渡るまで一致しており、『大系譜書』の内容がほぼ忠実に伝えられていると判断して良いであろう。

なお、本論文ではヒシャーム・ブン・アルカルビーの著した系譜学書を『大系譜書』の名で一括し、写本Lの刊本は *Kalbī-1*、写本Eの刊本は *Kalbī-2* と表記することで統一したい。

（2）ヒシャーム・ブン・アルカルビーの情報源

Kalbī-1, *Kalbī-2* には、各々の系譜伝承についてイスナードが書かれておらず、冒頭部分に「ヒシャーム・ブン・ムハンマド・ブン・アッサーイブは語った」と記されているに過ぎない。従って、ヒシャームもしくは父ムハンマドが誰からその系譜情報を獲得したのかについては、具体的に述べられていないのが実状である。

一方、*Fihrist*に記載されたムハンマド・ブン・アルカルビーの項目では、ヒシャーム・ブン・アルカルビーの言葉として、彼ら父子が系譜伝承を収集した情報源について、次のように書かれている。

[6] ヒシャーム・ブン・ムハンマドは言った。[私の父は、] 次のように言った。

「私は、クライシュ族の系譜を、アブー・サーリフから学んだ。アブー・サーリフは、それをアキール・ブン・アビー・ターリブから学んだ。また私は、キンダ族の系譜を、アブー・アルカンナース・アルキンディーから学んだ。彼は、誰よりもそれをよく知っている人物であった。また私は、マアッド・ブン・アドナーン族の系譜を、ナッジャード・ブン・アウス・アルアダウィーから学んだ。彼は、私が見聞きした人物の中で、最もそれに詳しい人物であった。また私は、イヤード族の系譜を、アディー・ブン・ズィヤード・アルイヤードーディーから学んだ。彼は、イヤード族について非常によく知っていた。」

ヒシャームは言った。私は、ラビーア族の系譜を、私の父 [=ムハンマド・ブン・アルカルビー] と、ヒラーシュ・ブン・イスマーイール・アル・イジュリーから学んだ。⁶⁶

まず、冒頭のアブー・サーリフ *Abū Ṣāliḥ* とは、アキール・ブン・アビー・ターリブ *ʿAqīl b. Abī Ṭālib* (60/679-80年没) から伝承を聞いたという記述から判断して、ウンム・ハーニー・ビント・アビー・ターリブ *Umm Hānī' bt. Abī Ṭālib* のマウラーであったアブー・サーリフ・バーザーム *Abū Ṣāliḥ Bādhām* (没年不詳) を指している可能性が高い。*Tahdhīb*に収録されたバーザームの項目に、彼から伝承を受け継いだ人物として「カルビー (*al-Kalbī*)」の名が挙げられて

いる点から見ても、まず間違いはないであろう⁶⁷。

アブー・アルカンナース・アルキンディー *Abū al-Kannās al-Kindī* は、*Kalbī-2* の本文においてアブー・アルカイヤース・イヤース・ブン・アウス・ブン・ハーニー *Abū al-Kayyās lyās b. Aws b. Hānī* と表記されている人物で、「ムハンマド・ブン・アッサーイブは彼からキンダ族の系譜を学んだ」と記されている⁶⁸。

ナッジャード・ブン・アウス・アルアダウィー *al-Najjād b. Aws al-'Adawī* については、様々な史料の中に該当する人物が存在しない。類似の名前を持つ系譜学者としては、*Kalbī-2* に登場するナッジャール・ブン・アウス *al-Najjār b. Aws* を挙げることもできるが⁶⁹、この人物はサアド・フザイム族であり、アダウィー (*al-'Adawī*) ではない⁷⁰。ナッジャール・ブン・アウスは、*Hazm* においてナッハール・ブン・アウス *al-Nakhkhār b. Aws* (60/680年頃没) とともに表記されている人物で⁷¹、ムアーウィヤ時代に活躍したナッサーブである。

アディー・ブン・ズィヤード・アルイヤードー *'Adī b. Ziyād al-lyādī* についても、諸史料に該当する人物は見あたらない⁷²。一方、父ムハンマドではなくヒシャーム・ブン・アルカルビーが独自に参照したというヒラーシュ・ブン・イスマーイール・アル・イジュリー *Khīrāsh b. Ismā'īl al-'Ijlī* の名は、*Kalbī-1* を始めとする各種の系譜学書に記載されている⁷³。しかし、*Sa'd* や *Tahdhīb* などの人名辞典、*Ṭabarī* などの年代記に全く登場しない点については、アブー・アルカンナースと同様である。

このように、カルビー父子が系譜伝承の典拠としているのは、大半が無名の人物ばかりであり、それらの人々が誰から伝承を受け継いで来たのか、それ以外にも典拠とした人物がいるのかどうか、といった点については全く不明である。いずれにせよ、少なくとも上記の伝承から推測できることは、ムハンマド・ブン・アルカルビーが膨大なアラブの系譜群を、幾つかの大集団ごとに別個の同時代人から伝達されて、これを独自に体系化したということである。

(3) 『大系譜書』の記述法

次に、ヒシャーム・ブン・アルカルビーが如何なる形式によって系譜を叙述しているのかについて、その要点を具体的に記しておきたい。

『大系譜書』に含まれる情報は、大きく分けて2つの部分から構成されている。すなわち、(a)「伝説的な祖先の血統を網羅的に述べた部分」と、(b)「当該集団の出身で後代に有名となった人物の系譜と事績を恣意的に抽出・列挙した部分」である。

例えば、Aという系譜集団の系譜を述べる場合、まず名祖であるA自身のナサブが明らかにされた後、Aの息子、孫、曾孫、玄孫など、彼の子孫の名前が次々と列挙される。この部分には、後代に名を知られている有力な人物の名前ばかりでなく、子孫を残さなかった無名の人物の名前も数多く含まれており、分量としては後者の方が圧倒的に多い。

子孫の紹介は、基本的に「Aは以下の息子を儲けた。すなわち、B、C、D……」という形式によって行われる。例として、ヤシュクル族の系譜を説明した箇所を抜粋してみたい。

[7] ヤシュクル・ブン・バクルは、以下の息子を儲けた。カアブ、ハルブ、キナーナ。彼らの母親は、スハーム・ビント・タグリブ・ブン・ワーイルである。

カアブは、以下の息子を儲けた。フバイイブ、アティーク。2人の母親は、ビント・アルアティーク・ブン・ガンム・ブン・タグリブである。

フバイイブは、以下の息子を儲けた。ガンム。

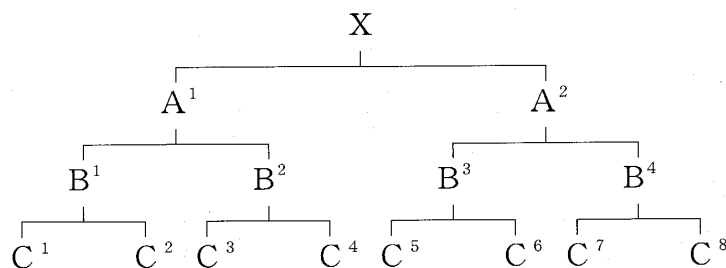
ガンム・ブン・フバイイブは、以下の息子を儲けた。グバル、サアラバ、ジュシャム⁷⁴。

このような記述が、数代～十数代に渡って、延々と続けられるのである。なお、上の例を見ても分かる通り、『大系譜書』には息子を産んだ母親の名前も合わせて記されていることが多い。

ところで、ある人物の子孫の数というものは、息子、孫、曾孫と世代が下るに従って、等比級数的に増えていくのが普通である。従って、十数世代に渡る一族の構成員を網羅的に記述しようとする場合、その子孫の数は莫大なものとなり、互いの血縁関係も極めて複雑な様相を呈することになる。ヒシャーム・ブン・アルカルビーは、そうした系譜群を確実に記述するため、ある1つの優れた方法を採用した。それが、以下に述べる「折り返し法」である。

「折り返し法」の特徴を一言で表現すると、ある集団の系譜を網羅的に記述しようとするとき、便宜的に1本の「基本軸」を設定して、これを中心に記述の順番を決めるという方法である。例えば、【図1】のような系図を持つ系譜集団X族があると仮定した場合、名祖Xから始まって、ある1本の血統(＝基本軸)が、最初に末端まで一挙に説明される。

- ①「名祖XはA¹、A²を儲けた。」
- ②「A¹はB¹、B²を儲けた。」
- ③「B¹はC¹、C²を儲けた。」



【図1】「折り返し法」の模式図

つまり、 $X \Rightarrow A^1 \Rightarrow B^1 \Rightarrow C^1$ という血統が基本軸として最初に説明され、途中で分岐した A^2 と B^2 の子孫に関する記述は、後回しにされるのである。次いで、末端に挙げられた各人物の子孫が羅列的に紹介される。

④「 C^1 の子孫には以下のような人物がいる。すなわち、 D^1 、 D^2 、 D^3 ……。」

⑤「 C^2 の子孫には以下のような人物がいる。すなわち、 E^1 、 E^2 、 E^3 ……。」

次いで、記述は1世代前の段階に戻り、最初の説明では省略した B^2 以下の詳しい説明が置かれる。

⑥「 B^2 は C^3 、 C^4 を産んだ。」

⑦「 C^3 の子孫には以下のような人物がいる。すなわち、 F^1 、 F^2 、 F^3 ……。」

⑧「 C^4 の子孫には以下のような人物がいる。すなわち、 G^1 、 G^2 、 G^3 ……。」

次いで、記述は更に1世代前の段階に戻り、 A^2 以下の子孫が同じ手順で詳しく説明されることになる。このような方法によって、 X 族に含まれる子孫の全てが、過不足なく網羅的に説明されるのである。

以上はあくまでも理論的な説明であり、実際のケースでは、途中で分岐した人物の子孫が全く説明されていない例も多く見られる。しかし、まず基本軸を設定した後で、下の世代から順々に折り返して説明していくという順序だけは必ず守られており、『大系譜書』を貫く重要な方法論となっていることは確かである⁷⁵。

一方、この方法で数十～数百名の人物が提示されていく合間に、「当該集団の出身で後代に有名となった人物の系譜と事績を恣意的に抽出・列挙した部分」の記述が挿入される。上記の説明で言えば、④⑤⑦⑧がそれに当たる。

[8] ムアーウィヤ・ブン・アブド・サアドは、以下の息子を儲けた。アブドッラー、ワール、ラビーア。

アブドッラーは以下の息子を儲けた。ムッラ。彼の子孫からは、伝承家 (rāwiyah) のヒラーシュ・ブン・イスマーイール・ブン・ヒラーシュ・ブン・フバイル・ブン・ヒラール・ブン・ムッラが出ている⁷⁶。

どの段階で網羅的な記述を中止し、後代に有名となった人物の紹介に移るかという問題は、系譜集団ごとに差が大きく、一定の傾向は観察されない。クライシュ族を除くアドナーン族（北アラブ）の場合、アドナーンから数えて十数代～二十数代までは全ての子孫が記述され、これより

下位の子孫に関しては、有名な人物だけを選んだ上で、そのナサブを列挙する傾向にあると言えるよう。

次に、『大系譜書』に見られる系譜集団の配列法についても、若干の説明を加えておきたい。既に述べた通り、ヒシャーム・ブン・アルカルビーの系譜叙述は、「折り返し法」の原則によって貫かれている。従って、南北アラブの系譜全体についても、この方法に従って各系譜集団の説明が配置されている点に特徴がある。

アドナーン族（北アラブ）の場合、全体の基本軸となっているのは、預言者ムハンマドの系譜である。すなわち、アドナーンからムハンマドに至る22代の血統が一挙に説明された後、ハーシム家、アブド・シャムス家、ナウファル家などクライシュ族の諸家が順々に説明され、次いでフザイル族、キナーナ族（除クライシュ族）、フーン族、アサド族などムドリカ系の諸集団が続き、次いでタービハ族、カイス・アイラーン族、ラビーア族の順で説明がなされている。つまり、預言者ムハンマドと近親度が高い集団ほど先に置かれ、遠縁の集団ほど後回しにされていることになるが、それぞれの集団内部では、再び独自の基本軸が設定され、「折り返し法」に基づく記述が行われている点に注意が必要である。

一方、カフターン族（南アラブ）の場合には、*Kalbī-1*と*Kalbī-2*の間で配列が異なっているため、基本軸とされている血統にも相違がある。すなわち、*Kalbī-1*の場合にはアウス族の下位集団であるアウフ・ブン・アムル族が筆頭に来ているのに対し、*Kalbī-2*の場合にはキンダ族の系譜が冒頭に来ているのである。しかし、(1) *Kalbī-1*の記述がマーリク・ブン・ザイド・ブン・カフラーンから始まっているのに対し、*Kalbī-2*はカフターンから記述が始まっていること、(2) *Fihrist*に記載されている『大系譜書』の目次が *Kalbī-2*のものと類似していることなどから、ヒシャーム・ブン・アルカルビー自身がカフターン族（南アラブ）の基本軸としたのは、キンダ族であったと見なすのが妥当であろう。

§ 5 ヒシャーム・ブン・アルカルビー以後の系譜学

ヒシャーム・ブン・アルカルビーの『大系譜書』は、既にアッバース朝時代の中期から各方面に絶大な影響を与えた。ジャーヒズが「碩学 (al-'allāmah) にして優れた系譜学者 (al-nassābah)」⁷⁷と評した彼の作品は、ムハンマド・ブン・ハビーブ、イブン・サッラーム、ムスアブ・アッズバイリー、ズバイル・ブン・バッカール、イブン・ハズムなど多くの学者によって引用され、アラブ系譜学の決定版となったのである。ここでは、彼の時代より後に活躍したアラブの系譜学者について、概観しておくことにしたい。

カルビー父子以後の系譜学者として最初に注目すべきなのは、ムハンマド・ブン・ハビーブ Muḥammad b. Ḥabīb (245/860年没) である⁷⁸。ムハンマド・ブン・ハビーブは『美文の書 (Kitāb al-Muḥabbar)』『麗文の書 (Kitāb al-Munammaq)』の著者として知られた学者であるが、

前述の通り、ヒシャーム・ブン・アルカルビーの『大系譜書』を伝承し、これを後代に伝えた人物でもある。

彼の作品である『美文の書』⁷⁹は、ヒシャーム・ブン・アルカルビーを始めとする様々な学者の著作を基にしながら、ジャーヒリーヤ時代とイスラム時代のアラブ史を、テーマごとに綴ったものである。その内容は、預言者ムハンマドの戦記、各地の総督リスト、メッカ巡礼を指揮した者のリスト、ジャーヒリーヤ時代の定期市、さらにはキリスト教徒の女性 (al-naṣrānīyāt) やエチオピア人女性 (al-ḥabashīyāt) から生まれた者のリストなど多彩であるが、ヒシャーム・ブン・アルカルビーから受け継いだ系譜学の知識も、随所で遺憾なく発揮されている。

この作品の最大の特徴となっているのは、「女性」に関する記述が極めて多いことである。アラブ・ムスリムの歴史書は、概して男性の系譜と事績を中心に語られるのが普通であり、女性の活動に関しては附随的に記されるか、全く触れられないことも稀ではない。これに対して『美文の書』は、「夫や父祖がバドル (Badr) の戦に参加した女性のリスト」「兄弟、息子、夫がウフド (Uḥud) の戦で殉教した女性のリスト」「3回以上結婚を繰り返した女性のリスト」など、様々なテーマに合致する女性の名前を数多く紹介しているばかりでなく、預言者ムハンマドやアッバース朝カリフの系譜を説明する際には、「母」「母の母」「母の母の母」といった母系の系譜を繰り返し紹介している。

次に、『財政の書 (Kitāb al-Amwāl)』の著者として知られるイブン・サッラーム Abū 'Ubayd al-Qāsim b. Sallām (224/838年没)⁸⁰は、ヒシャーム・ブン・アルカルビーの著作を参考としながら、これを再編集した『系譜の書 (Kitāb al-Nasab)』という作品を著した。その内容は『大系譜書』に記されたものと大差ないが、現存する写本には後述するズバイル・ブン・バッカーの補註が書き込まれており、僅かながら、アラブ系譜学の時系列的な変容過程を探る材料とすることができる。

メディナで生まれた伝承学者のムスアブ・アッズバイリー Muṣ'ab b. 'Abdallāh b. Muṣ'ab al-Zubayrī (236/851年没)⁸¹は、『大系譜書 (Kitāb al-Nasab al-Kabīr)』『クライシュ族の系譜 (Kitāb Nasab Quraysh)』という2点の系譜学書を著した⁸²。このうち前者は散逸してしまったが、後者については写本が現存しており、刊本も出版されている。彼の著した『クライシュ族の系譜』は、題名通りクライシュ族関連の情報のみを集めたものであるが、ヒシャーム・ブン・アルカルビーの『大系譜書』に含まれたクライシュ族関連の記述に比べると、やや分量が増えている。

一方、ムスアブの甥であるズバイル・ブン・バッカー Zubayr b. Bakkār (256/870年没)⁸³は、叔父の収集した系譜伝承を基にしながら、『アラブの情報と戦争 (Kitāb Akhbār al-'Arab wa-Ayyām-hā)』『クライシュ族の系譜と情報 (Kitāb Nasab Quraysh wa-Akhbār-hā)』『珍しい系譜情報 (Kitāb Akhbār Nawādir al-Nasab)』『同盟の書 (Kitāb al-Ahlāf)』ほか多数の著作を残した⁸⁴。特に、『クライシュ族の系譜と情報』はその一部が現存しているに過ぎないが、同種の文献としてはかつてないほど巨大な分量の作品となっている。これは、クライシュ族の系譜そのもの

を提示することよりも、同族出身者にまつわる逸話を紹介することに重点が置かれているからである。また、ムハンマド・ブン・ハビーブによって導入された母系の系譜叙述も、一部に採用されていることが注目される。

時代が下って4/10世紀以降になると、もはや新たな情報の収集と蓄積は見られなくなり、既存の系譜学書や人名事典を引用・再編集した作品が中心となる。その中でも代表的な作品は、イブン・ハズム 'Alī b. Aḥmad b. Sa'īd b. Ḥazm (456/1064年没)⁸⁵ の『アラブ系譜大全 (Jamharah Ansāb al-'Arab)』と、サムアーニー 'Abd al-Karīm b. Muḥammad al-Tamīmī al-Sam'ānī (562/1166年没)⁸⁶ の『系譜 (al-Ansāb)』であろう。

イブン・ハズムの『アラブ系譜大全』は、ヒシャーム・ブン・アルカルビーなど先行する系譜学者の著作を参照しながら、南北アラブの系譜体系を改めて整理した作品である。具体的な系譜情報そのものについてはヒシャームの作品を越えるものではないが、(1)現存する系譜学書としては初めて「系譜学」という学問の目的と意義を論じていること、(2)それまでの「折り返し法」を排し、ヒシャーム・ブン・アルカルビーとは逆の順番で系譜集団を配列していること、などの点に特徴がある⁸⁷。

サムアーニーの『系譜』は、これまで述べてきた一般的な系譜学書とは異なり、「ニスバの事典」という体裁を採っている。同書の中では、多数の代表的なニスバがアルファベット順に配列され、それぞれの由来となった集団名などが解説されている。また、その冒頭に系譜学関連のハディースを記載している点も有用である。

一方、南アラビア出身の歴史家として知られるハムダーニー al-Hamdānī (334/945年没)は、その著書『王冠の書 (Kitāb al-Ikīm)』において、カフターン族(南アラブ)の系譜伝承を取り扱っている。ハムダーニーの示した系譜体系の大枠は、ヒシャーム・ブン・アルカルビーの『大系譜書』と大きく変わらない内容となっているが、細部に若干の異同が観察されるほか、特にハムダーン族の系譜に関して他に類の無い豊富な情報を含んでいる。

その後のアラブ社会では、系譜学の分野で特筆すべき作品は殆ど生み出されていない。唯一の例外は、カルカシャンディー Shihāb al-Dīn Aḥmad b. 'Alī al-Qalqashandī (821/1418年没)⁸⁸ の『アラブの系譜に関する知識の極み (Nihāyah al-Arab fī Ma'rifah Ansāb al-'Arab)』である。この作品は系譜集団の事典形式を採っており、系譜情報そのものには何ら独自性は無いものの、本編の前後に附せられた系譜学理論が非常によくまとまっており、ムスリム社会における「アラブ系譜学」の最終的な形態を表現している。

その他、いわゆる系譜学書には含まれないが、イブン・ドゥライド Ibn Durayd (321/933年没)⁸⁹ の『派生の書 (Kitāb al-Ishtiqāq)』も重要な作品である。同書は、アラブの人名・集団名の原義を言語学的に解説したものであり、様々な系譜集団に関する挿話が含まれている点で貴重である。また、イブン・アブド・ラッビヒ Ibn 'Abd Rabbi-hi (328/940年没)⁹⁰ の『比類なき頸飾り (al-'Iqd al-Farīd)』、アブー・アルファラジュ・アルイスバハーニー Abū al-Faraj 'Alī b. al-Ḥusayn

al-Iṣbahānī (356/967年没)⁹¹ の『歌謡の書 (Kitāb al-Aghānī)』、イブン・アルアスィール‘Alī b. Muḥammad b. al-Athīr (630/1233年没)⁹² の『完史 (al-Kāmil fil-Ta’rīkh)』などにも、ジャーヒリーヤ時代のアラブ史に関する伝承が豊富に含まれている。

また、バラズリー al-Balādhurī (279/892年頃没) の『名士の系譜 (Ansāb al-Ashrāf)』やイブン・サアド Ibn Sa’d (230/845年没) の『大世代書 (al-Ṭabaqāt al-Kubrā)』など、各種の人名辞典にも、断片的ながら数多くの系譜情報が記載されていて有用である。

§ 6 おわりに

以上、アラブの系譜学が誕生・発展してきた過程について、分析した。本来ならば、イスラム諸学に占めるアラブ系譜学の学問的な位置などについても論じる予定であったが、残念ながら紙数の都合により割愛せざるをえなかった。機会があれば、稿を改めて分析を試みることにしたい。

- 1 特に優れたナッサーブのことを、強調形でナッサーバ (nassābah) と表現する場合がある。
- 2 ハーマ (hāmah) とは「頭部、頂上」を意味する語で、ここでは「一族の長 (ra’īs al-qawm)」を指す。
- 3 ラハーズィム (Lahāzim) とは、ラビーア族の下位集団であるイジュル族、タイムッラー族、カイス・ブン・サアラバ族、アナザ族の4集団がジャーヒリーヤ時代に結んだ同盟を指す。
- 4 ズフル・ブン・シャイバーン・ブン・サアラバ・ブン・ウカーバ・ブン・サアブ・ブン・アリー・ブン・バクル・ブン・ワーイル Dhuhl b. Shaybān b. Tha’labah b. ‘Ukābah b. Ṣa’b b. ‘Alī b. Bakr b. Wā’il のこと。シャイバーン族の大半は彼の子孫であり、実質的に同族の始祖である。
- 5 アウフ・ブン・ムハッリム・ブン・ズフル・ブン・シャイバーン ‘Awf b. Muḥallim b. Dhuhl b. Shaybān のこと。アブー・バクルが引用しているのは、ヌウマーン王 al-Nu’mān の作と言われている詩の一節。但し、*Kalbī-1* に拠ると、この詩はアウフ・ブン・ムハッリムではなく、その孫のアウフ・ブン・アビー・アムル・ブン・アウフ・ブン・ムハッリムについて歌ったものであるという (*Kalbī-1*, 497)。
- 6 ジャッサース・ブン・ムッラ・ブン・ズフル・ブン・シャイバーン Jassās b. Murrah b. Dhuhl b. Shaybān のこと。アラブ戦記に名高いバスース (Basūs) の戦で、タグリブ族の長クライブ・ブン・ラビーア Kulayb b. Rabī’ah を殺害し、抗争の発端を作ったことで有名 (*Aghānī*, vol.4, 140ff)。
- 7 *Kalbī-2*, vol.1, 168-9; *Hazm*, 322 に拠ると、キング王アムル ‘Amr b. Ākil al-Murār の妻はシャイバーン族のウンム・ウナース・ビント・アウフ・ブン・ムハッリム Umm Unās bt. ‘Awf b. Muḥallim b. Dhuhl であった。
- 8 この文句については不明。現存する系譜学書のいずれにも、ラフム族とシャイバーン族の姻戚関係を示す情報は見当たらなかった。
- 9 同じ家系に同名の人物がいる場合、年長もしくは有力な人物の方をアクバル (al-Akbar)、もう一方をアスガル (al-Aṣghar) と呼んで区別する。この場合は、ズフル・ブン・シャイバーン・ブン・サアラバの子孫ではなく、その叔父ズフル・ブン・サアラバの子孫であろう、の意。
- 10 *‘Iqd*, vol.3, 248. これと同じ伝承は、*Sam‘ānī*, vol.1, 36-40; *Qalqashandī*, 15-6 などにも収録されている。
- 11 *Hazm*, 5.
- 12 *Hishām*, 161.
- 13 Jubayr b. Muṭ‘im b. ‘Adī b. Nawfal b. ‘Abd Manāf. クライシュ族ナウファル家の有力者で、当初はムハンマドの暗殺計画に荷担するなど反ムスリム勢力の筆頭であったが、メッカ征服後に改宗。メディ

- ナで死去。
- 14 Sa'īd b. al-Musayyib b. Ḥazn b. Abī Wahb. クライシュ族マフズーム家の出身で、メディナの学識者。Sa'd, vol.5, 89-109 を参照せよ。
 - 15 Muḥammad b. Sa'īd b. al-Musayyib. *Hishām*, 108; Sa'd, vol.1, 318; *Tahdhīb*, vol.5, 115 などに名前のみ登場するが、父のハディースを伝承したこと以外は不明。
 - 16 *Jāhiz*, vol.1, 318.
 - 17 *Ṭabarī*, I, 2750. この他、*Ṭabarī*, I, 2495 には、クーファでアスパー組織 (al-asbā') を創設するときに系譜学者が呼び出されたという記述もある。
 - 18 *Jāhiz*, vol.1, 318-28; *Ḥazm*, 5-6.
 - 19 *Kalbī*-1, 531 に拠れば、Daghfal b. Ḥanzalah b. Yazīd b. 'Abdah b. 'Abdallāh b. Rabī'ah b. 'Amr b. Shaybān b. Dhuhl b. Tha'labah b. 'Ukābah. 従って、正確にはサドゥース族ではなく、その兄弟アムルの子孫ということになる。
 - 20 キサーイーとは衣服 (kisā') 商人を指すニスバで、系譜的な出自を表しているわけではない。Sam'ānī, vol.5, 65 を参照せよ。
 - 21 同じバクル・ブン・ワイル族だが、シャイバーン族の下位集団であるズフル族ではなく、ズフル・ブン・サアラバ・ブン・ウカーバ・ブン・サアブ・ブン・アリー・ブン・バクル・ブン・ワイル Dhuhl b. Tha'labah b. 'Ukābah b. Ṣa'b b. 'Alī b. Bakr b. Wā'il 族のこと。史料 [1] に出てくる「小ズフル族」に当たる。下位集団にサドゥース族がある。
 - 22 *Fihrist* にはこのように書かれているが、[4] などの史料ではムハンマドと出会ったことになっている。
 - 23 この人物の経歴については不詳。
 - 24 北アラブ系タミーム族の下位集団、クライウ・ブン・アウフ・ブン・カアブ・ブン・サアド・ブン・ザイド・マナート・ブン・タミーム Quray' b. 'Awf b. Ka'b b. Sa'd b. Zayd Manāh b. Tamīm 族のこと (*Kalbī*-1, 239)。ここでは、クライウからダッラールに至る系譜を順々に暗唱してみた、の意。
 - 25 シュラー (al-shurāh) の原義は「売る者 (al-shārī) 達」だが、ここではハワーリジュ派の別名。*Tahdhīb*, vol.2, 129 に拠ると、ダグファールは 65/684-5 年に起きたドゥーラーブ (Dūlāb) の戦いで溺死したと伝えられている。
 - 26 *Fihrist*, 101.
 - 27 Taym b. Murrah b. Ka'b b. Lu'ayy b. Ghālib b. Fihir Quraysh のこと。クサイイよりも前の世代で、分かれた家系のため、預言者の血筋から見れば傍流に当たる。
 - 28 クサイイは、メッカを征服して各地に散らばっていたクライシュ族を再集結させたことから、「まとめる者」の異名を持つ。
 - 29 この部分は、有名な詩の一節が引用してある。*Hishām*, 87 には「クライシュ族あるいは他のアラブの詩人」の作としか書いていないが、Sa'd, vol.1, 62 に拠れば 'Abdallāh b. al-Zibā'rā の作、*Ya'qūbī*, vol. 1, 243-4; *Sam'ānī*, vol.5, 624 に拠れば Maṭrūd b. Ka'b al-Khuzā'ī の作であるという (*Ṭabarī*, I, 1088-9 は両説を併記してある)。サリードとは粉々にしたパンを入れた肉入りスープのことで、「ハーシム」とは「粉々にする人」を意味する渾名。*Hishām*, 87 などに拠ると、ハーシムはカアバ巡礼に訪れる人々のために食事の提供を始めた有徳の人物であったという。
 - 30 'Abd al-Muṭṭalib b. Hāshim b. 'Abd Manāf のこと。預言者ムハンマドの祖父で、本名はシャイバ Shaybah。「その顔は闇夜でも月のように輝いた」「優れたるシャイバ」等はアブド・アルムッタリブに対する賛辞の一つで、彼の死を悼む哀歌などに見られる。*Hishām*, 108-14 を参照せよ。
 - 31 メッカ巡礼の際、アラファ ('Arafah) やムズダリファ (al-Muzdalifah) に逗留 (al-wuqūf) した人々が、再び出発する許可を出す役割のこと。クサイイの時代以前は、非クライシュ族がイファードの権利を持っていた (*Hishām*, 76-8)。その後、この権利はクライシュ族のメッカ征服時にクサイイが掌握し、改めて元の権利者達に与えるという形を取った。従って、この部分がクライシュ族の如何なる家系を意味しているのかは判然としない。
 - 32 カアバを訪れる巡礼客に対し、飲料水を提供する名誉のこと。ハーシムの死後は息子のアブド・アルムッタリブが継ぎ、その後はアッバース家の者が代々の権利を保持した。*Hishām*, 114 を参照せよ。
 - 33 *lqd*, vol.3, 248-9. なお、*Sam'ānī*, vol.1, 36-40; *Qalqashandī*, 15-6 にも同様の逸話がある。

- 34 *'lqd*, vol.3, 249-51; *Qalqashandī*, 15-6; *Aghānī*, vol.1, 7-8.
- 35 バクル・ブン・ワイル族出身。 *Fihrist*, 101 は彼の本名をウィカー・ブン・アルアシュアル *Wiqā' b. al-Ash'ar* としており、 *Ishtiqāq*, 213 にも同様の記述がある。しかし、 *Hazm*, 315 に拠ると、リサーン・アルフマッラの本名はヒスン・ブン・ラビーア *Ḥiṣn b. Rabī'ah b. Ṣu'ayr* であり、ナッサーブとして有名なのは息子のアブドゥッラー・ブン・リサーン・アルフマッラ *'Abdallāh b. Lisān al-Ḥumarrah* であるとしている。いずれにせよ、この人物の生涯については不詳。 *Ma'ārif*, 297 も参照せよ。
- 36 *Fihrist*, 102 に拠ると、本名はサッハール・ブン・アルアッパース *Ṣaḥḥār b. al-'Abbās*。アブド・アルカイス族出身でハワーリジュ派に属し、ムアーウィヤ治世に活躍した系譜学者であったという。 *Ma'ārif*, 191 も参照せよ。
- 37 *Fihrist*, 102 に拠ると、本名はワリード・ブン・アルフサイン *al-Walīd b. al-Ḥuṣayn*。
- 38 ヤシュクル族出身。 *Fihrist*, 102 に拠ると、本名はアブドッラー・ブン・アルード *'Abdallāh b. 'Arūd*。 *Ma'ārif*, 297 によるとアブドッラー・ブン・アムル *'Abdallāh b. 'Amr*。シーア派に属していたと言われる。
- 39 *Fihrist*, 103 に拠ると、ウマイヤ家のマウラー。
- 40 本名ズハイル・ブン・マイムーン・アルハムダーニー *Zuhayr b. Maymūn al-Hamdānī*。コーラン朗誦家、文法学者、系譜学者として知られる。
- 41 *Fihrist*, 103 に拠ると、クーファの伝承学者、詩学者、系譜学者。147/764-5 年没。
- 42 本名ハンマード・ブン・サーブール・ブン・アルムバーラク *Ḥammād b. Sābūr b. al-Mubārak* (156/772-3 年没)。父のサーブールは戦争捕虜のダイラム人で、息子のハンマードは 75/694-5 年に生まれたと言われる。
- 43 *Fihrist*, 101-4.
- 44 ヒシャーム *Hishām* 治世の全イラク総督 (職 105-120/723-738 年)。
- 45 *Aghānī*, vol.19, 59.
- 46 *Abū al-Yaqzān Ṣuḥaym* (ʿĀmir) b. *Ḥafṣ*。黒人を父に持つ系譜学者・歴史学者と言われているが、その生涯に関しては不詳。彼の没年に関しては、170/786-7 年説と 190/805-6 年説とがある。ここでは 170 年説に従ったが、いずれにせよ、後述するイブン・アルカルビーらとほぼ同時代人であることに変わりはない。
- 47 ムドリカ族とタービハ族から成るイルヤース族は、母祖の名を取ってヒンディフ族と呼ばれることもある。
- 48 *Fihrist*, 106-7. タミーム族関連の両文献についても、系譜情報を含んでいた可能性は大きい。
- 49 他の系譜学書を見る限り、「バヌー・タイム・ブン・ムッラ」の名を持つ集団は、アブー・バクルが属していたクライシュ族のタイム家以外に存在しない。従って、何故この一族だけが独立して記されているのかは、判然としない。
- 50 サドゥースィーの名は *Fihrist*, 53-4 に挙げられているが、その著作名に『クライシュ族の系譜概略』は含まれていない。
- 51 タスムとジャディースは、いずれも太古に滅びたとされる「失われたアラブ」の一部。
- 52 *Fihrist*, 113.
- 53 *Fihrist*, 112-3.
- 54 *Fihrist*, 111.
- 55 *Fihrist*, 114, 116.
- 56 ムハンマド・ブン・アルカルビーの父サーイブは第二次内乱中の 67/686 年、イブン・アッズバイル *Ibn al-Zubayr* 派の兵士として戦死した。父を亡くしたムハンマドは孤児として育ち、18歳でイブン・アルアシュアス *Ibn al-Ash'ath* の乱に参加、戦後はホラーサーン地方に亡命、のちにクーファへ移住した。146/763 年に 80 歳以上の高齢で死去。 *El²*, s.v. "al-KALBĪ"; Caskel, *Ġamharat an-Nasab: das Genealogische Werk des Ḥiṣām Ibn Muḥammad al-Kalbī*, Leiden, 1966, vol.1, pp. 72-5 を参照せよ。
- 57 British Museum, Add. MS. 23297, 全260葉。653/1255 年の日付がある。
- 58 Escorial, Arabe 1698, 全266葉。626/1229 年の日付がある。
- 59 Istanbul, Ragıp Paşa, 999, 全311頁。著者は不明だが、665年 Dhū al-Hijjah 月26日 (1267年 9月15日)

の日付がある。

- 60 Cairo, the National Library, No.V, 355, 全116葉。著者はヤークート・アルハマウィー Yāqūt b. 'Abdallāh al-Ḥamawī (626/1229 年没)。写本自体に日付は無い。
- 61 Caskel, *Ġamharat*, vol.1, pp. 82-123.
- 62 *Fihrist*, 107-8. 唯一、『コーラン註釈 (*Kitāb Tafsīr al-Qur'ān*)』という書名のみが挙げられている。
- 63 *Kalbī-2*, vol.2, 735.
- 64 *Fihrist*, 110.
- 65 ただし、同目次にはラビーア族の名前が欠落している。
- 66 *Fihrist*, 108.
- 67 *Tahdhīb*, vol.1, 321.
- 68 *Kalbī-2*, vol.1, 142.
- 69 *Kalbī-2*, vol.2, 721.
- 70 Caskel, *Ġamharat*, vol.1, p.47 を参照せよ。
- 71 *Ḥazm*, 448.
- 72 この人名の表記には 'Adī b. Rithāth al-Iyādī という異本もあるが、やはり当該の人物は各種史料中に見あたらない。*Fihrist*, 108, n.4 を参照せよ。
- 73 *Kalbī-1*, 551; *Kalbī-2*, vol.1, 73; *Ḥazm*, 313. 但し、*Ḥazm* では Khidāsh b. Ismā'īl になっている。
- 74 *Kalbī-1*, 560.
- 75 現存する系譜学書を見る限り、「折り返し法」を採用した最初の系譜学者はヒシャーム・ブン・アルカルビーであるが、この記述方法が彼または父ムハンマドの考案したものであるかどうかは、判然としない。ヒシャームの作品と同時代に書かれたサドゥースイーの著作が「折り返し法」らしき順序に従って書かれている点から見て、少なくともヒジュラ暦200年前後には一般的な方法であったと推測される。
- 76 *Kalbī-1*, 551.
- 77 *Jāhiz*, vol.1, 131.
- 78 *Fihrist*, 119.
- 79 同史料については、Lichtenstädter, I. "Muḥammad Ibn Ḥabīb and his Kitāb al-Muḥabbar", *Journal of the Royal Asiatic Society* (1939), pp. 1-27. を参照せよ。
- 80 アッバース朝時代中期に活躍した法学者・文法学者。アズド族のマウラーの子としてヘラート (Harāt) に生まれ、イラクの諸都市を遊学して回る。192-210/807-25 年にタルソス (Ṭarsūs) の法官職を務め、後にバグダードへ移った後、余生をメッカで過ごした。
- 81 メディナに生まれた伝承学者。教友ズバイル・ブン・アルアウワーム al-Zubayr b. al-'Awwām の子孫に当たる。
- 82 *Fihrist*, 123.
- 83 メディナの法学者・歴史学者。
- 84 *Fihrist*, 123.
- 85 アンダルスの神学者・法学者。有名な文学作品に『鳩の頸飾り (*Ṭawq al-Ḥamāmah*)』がある。
- 86 メルヴ (Marw) に生まれた伝承学者。
- 87 但し、クライシュ族の系譜に限っては預言者ムハンマドに近い集団から配列されている。
- 88 マムルーク朝時代の法学者・文学者。代表作に『盲者の黎明 (*Ṣubḥ al-A'shā*)』がある。
- 89 本名はムハンマド・ブン・アルハサン・アルアズディー Muḥammad b. al-Ḥasan al-Azdī. バスラで生まれて学問的修行を積むが、ザンジュ (Zanj) の乱を避けてオマーン ('Umān) に移住、後にバグダードへ移ってカリフのムクタディル al-Muqtadir (位 295-320/908-932 年) に仕える。アラビア語辞典『大全 (*al-Jamharah*)』の著者としても知られる。
- 90 本名はアフマド・ブン・ムハンマド Aḥmad b. Muḥammad. アンダルスの文学者。『比類なき頸飾り』のうち、「極上の真珠の書 (*Kitāb al-Yatīmah*)」が系譜学関連の記述に、「もう1つの真珠の書 (*Kitāb al-Durrah al-Thānīyah*)」がアラブ戦記に充てられている。
- 91 ウマイヤ家の血を引く歴史学者・文学者。代表作『歌謡の書』には、ジャーヒリーヤ時代の歴史に関する伝説が随所に盛り込まれている。

- 92 ザンギー朝時代の歴史家。彼の著作である『完史』の前半部分は年代記『預言者達と諸王の歴史 (Ta'riḫ al-Rusul wal-Mulūk)』から引用されているが、タバリーの省略したジャーヒリーヤ史関連の記述が豊富に補完されている。